

スリランカ ラニル・ウィクラマシンハ大統領閣下との懇談会 概要報告



◆ウィクラマシンハ大統領（右から4番目）、小林委員長（左から3番目）

日 時 2022年9月28日（水）14：20～14：45

場 所 帝国ホテル東京4階「桃の間」

出席者

<日本側>小林 文彦 日本・スリランカ経済委員会委員長をはじめ13名

<スリランカ側>ラニル・ウィクラマシンハ大統領をはじめ6名

概要は以下のとおり

小林委員長 挨拶

ラニル・ウィクラマシンハ大統領をはじめとする皆様の来日を、心より歓迎申しあげる。閣下にお目にかかるのは本日で2回目となる。ご多忙の折、懇談の機会を得られたことに、重ねて感謝申しあげる。

日本・スリランカ経済委員会は1978年8月に、両国経済界の相互理解と親善を深め、経済交流を促進する事を目的として設立された。その後、約40年の長きに渡り、セイロン商業会議所を中心とするスリランカ・日本経済委員会との間で、合同会議の開催を中心に、スリランカ政府・経済界からの要人受入れ、日本でのセミナー開催など、様々な取り組みを行ってきた。

2018年1月には、日本商工会議所の三村会頭を団長とするミッションが初めてスリランカを訪問し、70名を超える企業トップらが参加した。当時の首相のウィクラマシンハ大統領閣下にも表敬訪問したが、このミッション派遣については、当委員会もその実現に尽力した。

本年は日本とスリランカの国交樹立70周年を祝う記念すべき年であるが、日本とスリ

ランカの関係を語るうえで、私たちは1951年のサンフランシスコ講和条約における、故ジャヤワルダナ元大統領の演説を忘れることができない。日本への賠償請求権を放棄し、国際社会の一員として受け入れられるよう訴えた演説は戦後日本の復興と、貴国との友好関係の礎となり、翌1952年の国交樹立から今日まで極めて良好な関係を築いてきた。

当委員会としては、引き続き日本とスリランカの経済交流の懸け橋の役割を担い、両国間の貿易・投資の拡大と友好関係の緊密化に貢献していきたい。

昨今、スリランカはコロナ禍や開発金融に起因する対外債務の問題に加えて、エネルギー・食料価格の高騰もあり、厳しい経済危機の状況にあると承知している。大統領閣下が、今回の訪日を契機にスリランカ経済再興のきっかけを掴んでいただきたい。今後のスリランカの発展とウィクラマシンハ大統領のご多幸を祈念して、記念品をご用意した。起き上がり小法師は福島県会津地方を代表する縁起物で、転んでもすぐに立ち上がる場所から、粘り強さと健康のシンボルとして大変縁起が良いとされている。

ウィクラマシンハ大統領 ご挨拶

スリランカは難しい時期にある。過去、政策において過ちを犯したからであるが、原因の一部は世界的な経済危機、地政学的情勢もある。国としてこの危機を克服し、復興していきたいと思う。そのためには一層の努力が必要であり、経済の安定化を図り、構造改革を進めなければならない。現在、重要な時期にさしかかっており、債権国との様々な話し合いを経て、債務の再編と返済を図る必要がある。三大債権国が日本、中国、インドであるが、すべての債権国と話をしており、皆平等な取扱いとしている。今回、日本政府には、ぜひ債務返済の取り組みの共同議長を務めていただきたいと話している。二国間ベースの債権国に対しては、債務救済策を訴えるとともに、プライベートベースの債権者との話し合いにも応じる必要があると考えている。

既に事務レベルではIMFとの間で経済安定化プログラムについて合意している。同時に我々は早期の経済回復をどのように進めるか考えなければいけない。スリランカにおいてはビジネスにおいていくつもの壁ができてしまっているため、それらを全て取り除きたい。

今後、BOI（スリランカ投資委員会）、EDB（スリランカ輸出促進局）の構造改革を行って、輸出保険などもあわせた一つの組織として機能させたいと考えている。インフラ整備の投資についても、工業団地等を担当している組織を新たに改革したい。日本企業、投資家には、どういう点にビジネスの壁を感じるのか、何が遅滞しており、不便を感じているのか等について意見を聞き、スリランカに新たな投資を呼び込みたい。スリランカを信じていただいて、心から感謝申しあげる。



(懇談の様子)



(記念品贈呈)



(右からウィクラマシンハ大統領、小林委員長)

以上